

日本の岩登りは1924年神戸にロッククライミング・クラブ（RCC）が設立され本格的に始まったとされています。

岩場の少ない北海道でありながら、その草創の前後からすでに札幌近郊の八剱山や小樽赤岩でロッククライミングが試みられていました。1926年頃から小樽赤岩は格好のロッククライミング・ゲレンデとして本格的に登られるようになり、爾来今日まで小樽赤岩は多くのクライマーを輩出してきました。

小樽赤岩は小樽市北方4kmの赤岩山北面に位置した急峻な断層海岸で、幅およそ2km、高差は高いところで120mにおよんでいます。岩塔、岩稜、岩壁が乱立し、岩質は総じて脆いが、登り込まれたルートはほぼしっかりしており、絶好のロッククライミングルートを提供しています。

小樽赤岩は中赤岩、西赤岩、東赤岩に大別され、ルートは200を越え、岩登り入門から、中級ルート、上級者のトレーニングの場と多くの登山者に愛され親しまれてきました。

1970代に入ってからフリークライミングも盛んになり、全国の先駆けとなる有名なルートも誕生しています。また、冬季の赤岩は激しい日本海からの吹雪を受け、困難な冬季岩壁登攀の場ともなっています。

これまで、岩登り入門としてよく利用されるゲレンデやフリールートは一部のクライマーによって整備されていますが、開拓時に拓かれたルートや多くのクライマーを育てたマルチピッチのクラシックルートは訪れるクライマーが少なくなったこともあり荒れるに任された状態になっています。ルートの荒廃が進み、特にクライマーの安全を確保する支点となるビレイ点のハーケンやボルトは、使用に耐えられないほど腐食している状態になっていました。そのことが、最近のクライマーを遠ざけている要因でもあり事故の原因にもなっています。

ビレイポイントの整備は、これまでもクライマーの話題にのぼっていましたが本格的に着手する山岳会もクライマーも出てこない状況でした。

2009年、道央地区連盟が発起人となり北海道山岳6団体の交流集会在開催され、この交流の場で再び小樽赤岩ルート整備の話題が持ち上がりました。

2010年、北海道山岳連盟と北海道勤労者山岳連盟が、「小樽赤岩ルート整備協議会」の立ち上げで合意しました。「小樽」という地域的な課題であるため小樽山岳連盟と道央地区勤労者山岳連盟が中心となって協議会を構成し、整備を進めることになりました。

2011年、労山全国連盟に「ルート整備資金」の申請をして10万円の助成が認められ、募金活動や準備のための作業がスタートしたのです。

2011年8月に「リボルト講習会」を赤岩で開き整備に着手しました。

これまで、22の山岳会や団体、クライマーなど24人から約82万円の募金が寄せられ、中赤岩、西壁周辺、東小岩塔、東大壁周辺の33ルートに90カ所のビレイポイントの整備ができました。今年は、残されたルートや三つの小岩塔周辺を整備し一区切りとしたいと思っています。